

東京のモスク

アミール・ムハマド

(作家・出版業・映画作家、「インターナショナル・コンペティション」審査員)

2003年、それなりの助成を得て東京に滞在していた私は、『東京のモスク』なるドキュメンタリーを制作しようと画策していた。

聞くとところによると、この街には22のモスクがあり、最大のもので1000人以上を収容するトルコ風建築が代々木〔上原〕にあるらしい。

私のアイデアはこうだ。モスクに行き、そこへ日参する礼拝者をそれぞれにつき5人選び、その挙動を観察する。私が捉えたいのは、そこへどんな人がやってくるのかということである。日本人はどのくらいいて、それに対して移民労働者、祖国を出てきた人、旅行者はどのくらいいるのか？日本人でなければ、彼らはどの国からやってきたのか？

カメラは文字通りモスクの外に出ることはない。外部の音（往来の音、あるいは宣伝広告の文句だろうか？）が漏れ聞こえてくることはあるだろう——それはときに気付かないほどの音量となるので、噂話のように頼りなく感じられることだろう。

バスト・ショットで話をするような人は出てこないし、おそらくはナレーションの類（何について語るのか？）もな

いだろう。あるいは、話をする人間などまったくいないかもしれない。カメラはほとんど動かさず、ただモスクに祈りの放送が響く環境それ自体を観察するのみだ。撮影時間をそれぞれ同じ長さにすれば、まるでジェームズ・ベニングだ！

留意しなければならないのは、一つひとつのモスクの微妙な差異——建物の造りや音響、モスクの社会的な位置づけ——であり、画一的なものと思われるもののなかに独特なものを見出さなければならない。他のものより人が集まるモスクもあれば、ある祈りの時間にはほとんど人がいないようなモスクもあるかもしれない。

私がこのドキュメンタリーを制作しなかったのは、2003年当時、イスラムがドキュメンタリーにおける一大トレンドとなっていたからだ。責めるなら、その数年前にテロリストが起こした暴力を責めてほしい。CNNの主導するような風潮には便乗しなくなかったのだ。

だがアイデアはまだここにある。盗用は歓迎だ。クレジットもいらぬ。神の啓示があったと言えば、それでいいのだ。
(中村真人訳)